for Cities Hand Book

STEP IN, CITY TRANSFORMS.

わたしが関わると、まちが変わる。

わたしが関わると、
まちが変わる。

わたしたちは、
時間とともに固着した
都市と都市、
都市と人、
人と人との関係性のあいだではたらき、
地域や、空間を
やわらかくひらくための
都市体験のデザインスタジオです。

INDEX

4 ABOUT US
私たちについて

6 BACKGROUND
どうしていま、わたしたちが
都市のことを考えるの？

8 APPROACH
私たちが大切にしていること

10 ASSET
forcities.org

12 MEMBER
メンバー紹介

14 PROJECT
これまでの取り組み

16 FIELD
私たちが力を発揮できる領域

18 URBANIST IN STUDIO
for Citiesの
発掘し、ひらく

40 FOR CITIES WEEK
for Citiesの
あつまり、つなげる

54 URBANIST SCHOOL
for Citiesの
ともに、まなぶ

80 PUBLICATION
for Citiesの
記録し、とどける

110 HOW TO WORK WITH US
for Cities とはたらくために

112 QUESTION 1
プロジェクト期間は、どれくらい？

114 QUESTION 2
for Citiesが得意なことは？

116 QUESTION 3
これまでの実績を教えて！

118 QUESTION 4
for Citiesと
やってみてよかったことは？

122 QUESTION 5
これからやりたいことは？

124 APPENDIX
おまけ

126 A to Z
アーバニストになるためのA to Z

「都市」とは？

都市は、人が多く集まり政治・経済・文化の中心になっている所や、自然よりも人工物が多い所と定義されることが多い。だけれど、私たちは都市を人間が創意工夫のうえ作り上げた“巣”のようなものと捉えている。
“巣”は生物たちによって一つひとつが工夫してつくられ、また日々手入れがされることで、結果それぞれの個性が反映された複雑なものとして立ち上がる。人々の生活もまた、みんなすべからく「違った工夫や手入れ」がされていて個性的だ。そこから考えをスタートさせてみると、都市とはそうした一人ひとりの“巣”が関係し合うエコシステムの総体としても見ることができる。そう思えば、東京のような大都市も、人口数百人の島の繁華街も、国や地域を問わず、人間が集まり生活をするすべての場所は都市だと言える。
国連が発表したデータによると、世界の都市人口の割合は2050年までに70%を超えるという。これからの時代、私たちのほとんどが、都市という巨大な巣に住むことになる。だからこそ、私たち一人ひとりが、都市というもののこれからのあり方に目を向けてみる必要があると私たちは考えている。

アーバニストとは？

都市を主体的に楽しみながら生活している人のこと。都市・建築・まちづくり分野の専門家だけではなく、都市を舞台に、主体的にさまざまな活動を行う実践者のこと。

ABOUT US

BACK GROUND

どうしていま、わたしたちが都市のことを考えるの？

2016年、東京・渋谷。私たちが出会ったこの街は、オリンピックに向けた都市の開発に湧き立っていた。毎日、風景が目まぐるしく変わるなか、自分たちの街に対する想いや願いは、ちっとやそっとでは聞いてもらえないことに気づかされた。私たちだけじゃない。電車で通学しているあの中学生の女の子も、昔からこの辺りに住んでいたあのおばあちゃんも、きっとそれぞれの想いがあるはず。なのに家から一歩外へ出ると、まったく自分の「こうしたい」が暮らしに反映されていかない。どうしたら、“自分たちの手で”都市の暮らしを作っていけるだろう？　それを考えてみたくて、私たちはfor Citiesを立ち上げることにした。

WHAT WE ARE ?

そこで暮らす一人ひとりの“作品”の集合体としての都市を目指すこと

都市には、さまざまな偏愛をもった人がたくさん集まっている。みんなが好き勝手につくる自分の居場所を、私たちはその人の「作品」のようだなと思う。民家のバルコニーからはみ出た大量の鉢植えたち。少しでも目立とうとギラギラに輝かせた商店の看板。近隣住民が大切に掃除をして管理する公園。若者たちが集う駅前のチルスポット。それらが集まり都市という総体が作られるのだとしたら、私たちはその小さな作品たちを大切にしたい。そこには、一部の権力者や政治家が、マスタープランを描いて作る理想の都市にはないストーリーが宿っているから。

HOW TO DO ?

アジア発でアーバニストをつなげる

今まで、ヨーロッパを中心に海外での暮らしが長かった私たち。All Things Urban、Actors of Urban Change、Future Architectureなど、都市の未来を共に考える国境を超えたシンクタンクや実践のプラットフォームには、とても影響を受けてきた。for Citiesの結成を決めたアムステルダムでも、海外のアーバニストたちと協業したり、意見交換をする機会が日常的にあった。私たちが暮らす日本、そしてアジアを翻って見てみると、まだまだこうした機会は貴重なままだ。欧米の都市モデルを参考にすることも大事だ。でも、私たちはその先にある国を超えた都市・建築・まちづくりの実践や人材のプラットフォーム、それに紐ずくコミュニティを、アジア発で確立していきたいと思っている。

APPROACH

私たちが大切にしていること

遊び心のあるアクションと、小さな介入

長期間に渡る壮大な都市計画を考えるだけではなく、目の前の状況を更新するために都市へ介入する機会を小さく生み出していく。そうしたアクションを積み重ねていくことを通じて、中長期的な変化の兆しを作っていくことを大切にしていきたい。

グローバルとローカルを結ぶ、よそものの視点

国内外で活動をするなかで、社会状況や文化の違いはあるものの、国や分野を超えた共通の課題を持っていたり、よそ者だからこそ見出せる地域の価値があると感じている。だからこそ、歴史やアイデンティティなど、ローカルの文脈やユニークさを大切にしながらも、グローバルな視点でローカルの課題やこれからを考える実践を作っていきたい。

個人個人の市民と共に、都市の風景をつくる

都市の日常を作るのは、政治家や建築家、都市デザイナーだけではないはず。そうした状況を変えていくためにも、もっと多くの人々が意志を持って都市に関わっていく必要があると考えている。「自分たちの都市を、自分たちでつくる」、こうした市民の自覚が芽生える機会を作りだしたい。

ASSET

forcities.org

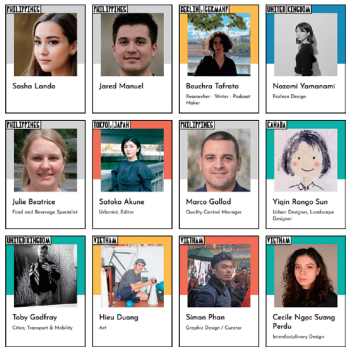
インターナショナル・プラットフォーム

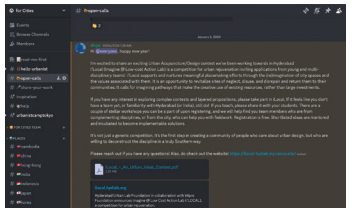
インターナショナル・プラットフォーム「for Cities.org」は、都市を舞台に活動する実践者のための国を超えたアイディアとネットワークのプラットフォームです。
建築家、都市計画者、研究者、行政関係者、アーティスト、デザイナー、ジャーナリスト、起業家など、都市をフィールドに活動する実践者＝「アーバニスト」が、それぞれのナレッジを共有し、これからの都市づくりに必要な実践を分野横断的に学び合う場所です。
メンバーはサインアップすることでアイデアを自由に登録することができ、グローバルにプロジェクトを共有できるほか、年に1度のエキシビションや地域のプロジェクト、教育プログラムへの参加、メンバー内の交流などさまざまな機会を得ることができます。

3 つの機能

1. インターナショナル・コミュニティ

アジア・欧米圏を中心に、モロッコやコソボ、メキシコなど約65ヶ国のさまざまな国で都市・建築・街づくりに関わる若手の実践者たちが募るコミュニティを運営しています。ミートアップや教育プログラム、展覧会への参加、Discordでの定期的な情報交換やコラボレーションを行っています。





2. トレンドリサーチ

現代都市を読み解くためのトレンドやテーマのリサーチを行っています。毎年複数のテーマを設定し、プラットフォーム上でアイデアや先行事例を国内外から募ります。

3. アイデアバンク

プラットフォームのデータベースでは、世界中から集まる都市・建築・街づくりのアイデアや先行事例を登録・検索できます。プロジェクトのインスピレーションを集めたり、特定の課題に対する効果的な手法を学ぶことができます。

MEMBER

YUKAKO ISHIKAWA

石川由佳子

「自分たちの手で、都市を使いこなす」ことをモットーに、国内外の様々な人生背景を持つ人たちと共に、市民参加型の都市体験のデザインを行う。(株)ベネッセコーポレーション、(株)ロフトワークを経て独立。都市体験のデザインスタジオ「一般社団法人 for Cities」を立ち上げ。同社団法人、共同代表理事。まちとみどりとの関係性を再編集する街路樹のデータプラットフォーム「Dear Tree Project」主宰、みどりを取り巻く仕事のこれからを考え創造していく、「一般社団法人Social Green Design協会」理事、意味を紡げる都市を考える「Meaningful City Magazine」企画・編集を行う。リサーチ、企画、編集、教育プログラムやアートプロジェクトの開発など、都市をテーマに行う。都市の中で、一番好きな瞬間は「帰り道」。

https://linktr.ee/yukakoishikawa

MARIKO SUGITA

杉田真理子

2016年ブリュッセル自由大学アーバン・スタディーズ修了。2021年より都市体験のデザインスタジオ（一社）for Cities共同代表理事、（一社）ホホホ座浄土寺座共同代表理事。出版レーベル「Traveling Circus of Urbanism」にて都市・建築・まちづくり分野における執筆や編集ほか、京都・浄土寺にて1934年築の洋館を改修した複合アート施設「Bridge Studio」の運営を行う。これまでヨーロッパ、北米、アフリカなどでの海外生活の経験を活かし、リサーチほか文化芸術分野でのキュレーションや新規プログラムのプロデュース、ディレクション、ファシリテーション、アーティストとしての表現活動などを、国内外を軽やかに横断しながら活動を行う。

https://linktr.ee/MarikoSugita

PROJECT

FIELD 私たちが力を発揮できる領域

発掘し、ひらく

- 新規プログラム開発
- 地域の資源の再編集・価値の掘り起こし

地域や場、空間の利活用のために、眠っている資源の発掘を行います。また、そうした資源をオープンにしていくことで、自発的にまちづくりに関わる「アーバニスト人材」が自発的に参加できる機会を作り、地域や場に新しい関係を結ぶ機会を作りだします。

あつまり、つなげる

- プラットフォームの運営
- エキシビションやワークショップの企画・実施

国内外で活躍する「アーバニスト人材」がオンライン・オフラインを問わずあつまり、交流する場や機会を作ります。これまでになかったタイプの熱を生み出すとともに、彼らと共に中長期で関係性を構築するようなプログラムの企画開発・運営までを行っていきます。

つくる／あそぶ

私たちが取り組む領域の中心にあるのは、「つくる／あそぶ」ということ。どんな取り組みも「楽しくなければ続かない」し、「考えるためには手を動かしてつくることが大切」だと考えています。もっとつくりたい、もっとあそべるはず、そんなご依頼もウェルカムです。

ともに、まなぶ

- アーバニストスクールの企画・実施
- アーバニスト人材の育成
- 教材・ツール開発

多様化し、複雑になっていく都市と個人との関わり方を見つけるため、まなびのための仕組みや、教材・ツールを作ります。また、視点や、意見の交換を促すために多様な人があつまり、ともに学べる場を提供することを目指します。

記録し、とどける

- ポッドキャストの収録・発信
- メディアの制作・販売

国内外の都市で起こっている固有の出来事やトレンドについて記録し、発信します。また、地域や拠点と連携し、固有のストーリーを編集し、より多くの人に届けるために適切な媒体づくりまでを考案し、実施します。

for Citiesの

発掘し、ひらく

URBANIST IN STUDIO

アーバニストの誘致と、プログラムのインキュベーション

長い時間をかけて固着した都市や場は、つながりが薄れ、流動性が下がることで、特定の人やものしかアクセスができなくなっていることがあります。
for Citiesは国や地域、専門性や属性の異なるアーバニストとの関わりを生かし、異なる文脈をもった「ひと・もの・こと」を呼び込むことで内と外をつなげ、場の活動を活性化することであらゆる拠点をひらきます。

CASE STUDY1

11-1 STUDIO FELLOWSHIP PROGRAM

OVREVIEW

断片的になった地域資源のリサーチと、それらをもう一度つなぎ合わせるための実装

「街全体のリソースを使って面白いことがしたい」そんなプロジェクトを支援するための、3ヶ月間のフェローシップ・プログラム。池袋を拠点とするシェア工房・アトリエ「11-1 Studio」とのコラボレーションで、公募で集まった“フェロー”たちと共に、「断片的になったかつての地域資源を、もう一度つなぎ合わせる」をテーマに、池袋・要町のエリアでのリサーチの実施や、街のリソースを用いた参加者自身のプロジェクトの検証・実装を行いました。

場所：11-1 Studio（東京都・板橋区）
期間：2022年8-10月
パートナー：11-1 Studio
デザイン：elements
HP：https://11-1fellowship.studio.site/

板橋から北池袋周辺までの豊島区北部のエリアでフィールドワーク。地域の魅力や資源を掘り起こしていく。

地域で自由に使えるフリー屋台を、11-1 Studioで制作。屋台がある場所には、人が集まってくる。

街の資源を総観する“シティ・スキャニング”。11-1 Studioにて、それぞれの気づきを発表しながら地域資源のマッピングを行う。

共同リサーチの最初は、瞑想とゴミ拾いからスタート。静かな心になり、街との個人的な関係性を感覚的に磨いていく。

PROJECT EPISODE

池袋は少し前だと、「やんちゃなまち」という印象の人も多かったかもしれない。
そんななか、リサーチを通して知ったのは、この街の発展を支えた町工場と、池袋モンパルナスという地域のアーティストによるコミューンの存在だった。
後継者がいなくなり、徐々に衰退しつつある街並みを、池袋に集まった若者たちと一緒に何度も見て歩いた。
玄関の建て付けが悪くなったら、あそこの材木屋に行けばいい。
何かを修理する必要があれば、近くのあの店に行けばいい。
街中にある地域資源に良い意味で”頼り”ながら暮らす感覚を、私たちは「街角アーバニズム」と名づけた。

CASE STUDY2

URBANIST CAMP TOKYO

OVREVIEW

都市の“野生”を再考するための学びと実証実験

アート・アーバニズムをテーマにアーティストと街をつなぐ拠点「YAU」。東京・大丸有エリア（大手町・丸の内・有楽町）を舞台に参加者を集め、リサーチから実際の都市介入を行うアーバニスト・キャンプ・プログラムを彼らと行った。「Re-Wilding『再野生化』/ 生き物らしくあれる居場所をどうつくるか？」をテーマに、リサーチからアウトプットまでどのように創造的な介入をデザインできるのか、アーバニストに必要なスキルを養うことを目指したプログラムを考案。プログラムを通じたアウトプットとして、人間と人間以外の生き物や土地との関係性をもう一度つなぎ合わせるためのインターフェースを、大丸有エリアに参加者と共に仮設的に実装しました。

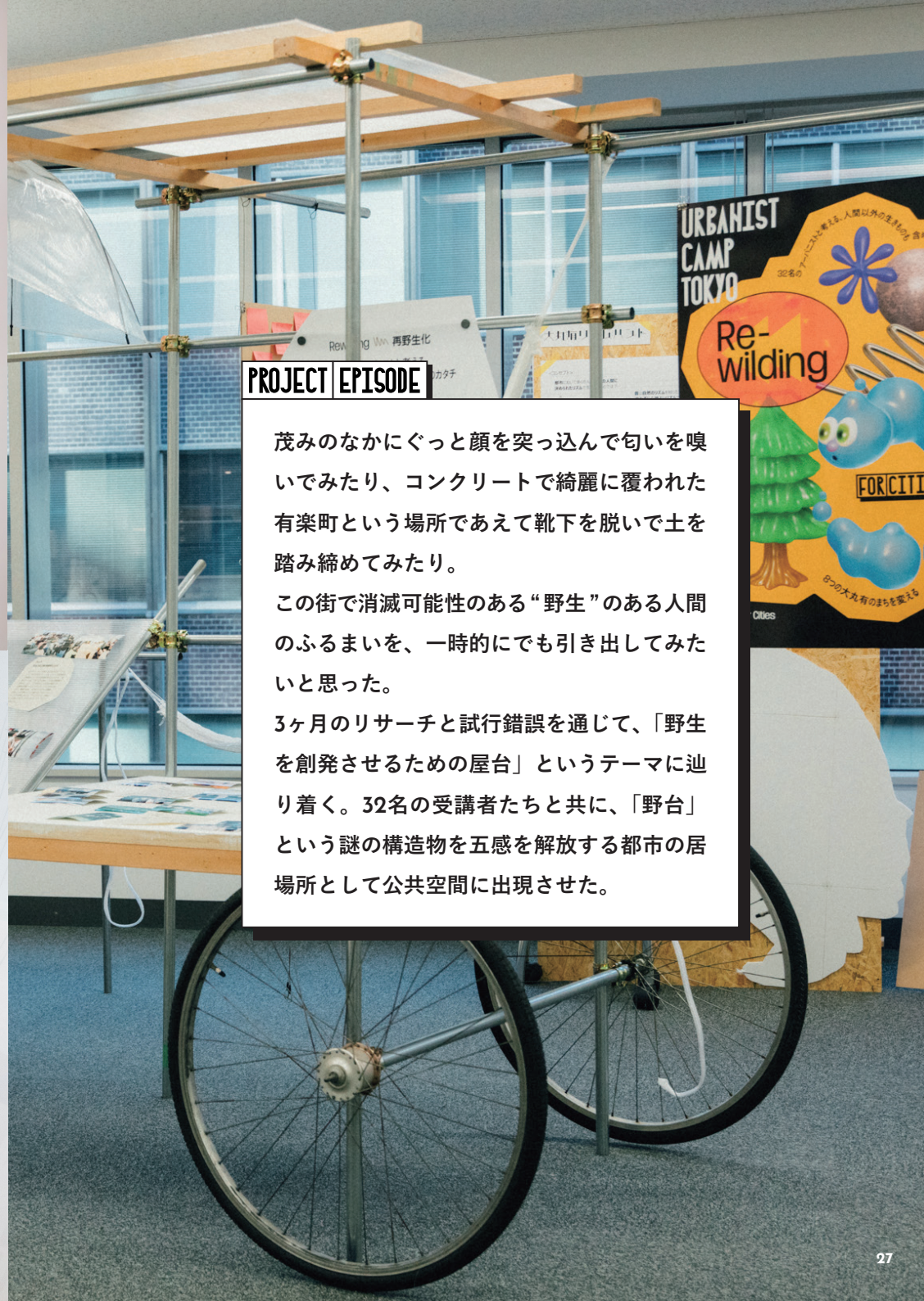
場所：YAU STUDIO（東京都・有楽町）
期間：2023年9月
パートナー：YAU 有楽町アートアーバニズム
展示デザイン：Eugene Soler (建築家・アーティスト)
ゲスト講師：足立泰啓、景浦由美子、原田芳樹、松井宏宇
アドバイザリー：山崎 嵩拓（東京大学総括プロジェクト機構特任講師）
協力：エコッツェリア協会、Studio KOTOBA、Slit Park YURAKUCHO
イラスト：nico ito
デザイン：Slogan Studio

エコッツェリア協会 の松井宏宇さんによる「生き物の生息地をめぐるツアー」を皇居周辺で実施。道路脇に生えている植物やまちの生態系デザイン実施等について学ぶ。

「再野生化」とは何か？ 都市に生息する生物の視点で、彼らの生態系や生き残り戦略について学ぶ。

眠っている五感を解放する「野台」を制作。”生き物らしくいられる居場所”を、有楽町の街に出現させた。

「土地の解像度を高める」ことをテーマに、この土地を構成している要素を採集し、拠り所となるエレメンツについて思考した。



PROJECT EPISODE

茂みのなかにぐっと顔を突っ込んで匂いを嗅いでみたり、コンクリートで綺麗に覆われた有楽町という場所であえて靴下を脱いで土を踏み締めてみたり。
この街で消滅可能性のある“野生”のある人間のふるまいを、一時的にでも引き出してみたいと思った。
3ヶ月のリサーチと試行錯誤を通じて、「野生を創発させるための屋台」というテーマに辿り着く。32名の受講者たちと共に、「野台」という謎の構造物を五感を解放する都市の居場所として公共空間に出現させた。

CASE STUDY3

FOR NAGATA, FOR CITIES

OVREVIEW

見過ごされてきた街の魅力と資源を発見するための滞在制作

for Citiesの2人が神戸市・長田区に3週間滞在し、空き家だった長屋を拠点に長田区の魅力と資源を発見するための滞在型フィールド調査を行いました。長屋はオープンスタジオとして開放し、調査の過程をオープンに発表する場として活用。結果、国内外のさまざまなアーバニストが立ち寄り、それぞれの専門性を活かしたワークショップや共同での成果発表につながり、また対話を生み出す機会となりました。リサーチの内容は展示及びレポートとして発表されています。

場所：シリイケバレー（神戸市・長田区）
期間：2022年9-10月
パートナー：神戸市長田区まちづくり課
デザイン：STOMACHE
協力：西村組・合同会社廃屋

ベトナムや韓国など、多国籍な長田。食材店も国際食豊かで飽きない。住みながらしか見えてこない風景を捉えたい。

神戸を拠点に活動する廃屋建築集団「西村組」のアジトの一つに滞在する。ここでの生活そのものが実験でもある。

リサーチ手法の一つ・定点観測。ベトナム人など外国人も多く暮らす長田では、まるで日本ではないかのように感じる光景もあり、観察に飽きない。

毎日何かしらの催物が開催されている長田。路上がステージに変わる瞬間を、何度も目撃した。

PROJECT EPISODE

長田に到着した初日、西アフリカ・トーゴ出身のダンサーが作る晩ご飯を食べてから、知らないおばあさんのお葬式に、みんなで行った。ガツンと強烈な初日の体験は、なんのことはない、長田での日常だった。

「アーバニストってなんのことやねん。分からんけど、まあ座りなよ」

私たちが２週間滞在をした長田には、異質な存在を、分からないままに“まあまあ”と受け入れてくれる懐の深さがある。ここで私たちは、ここにしかない特別な存在や現象をアーカイブし、名もなきストリートに名前をつけた。私たちが思い描く理想の町の風景には、いつも、長田がいる。

CASE STUDY4

HAIOKU AIR

OVREVIEW

ベトナムの若手アーティスト5名を招いて行った、アーティスト・イン・レジデンス

廃屋建築集団・西村組とfor Citiesが協働で企画した「HAIOKU AIR」はベトナムから５名の若手アーティストを神戸に招待（うち2名はオンラインでの参加）する滞在制作。“生き物”としての建築や都市、”“巣”的建築」をテーマに、ブリコラージュ的、セッション的に空間やカルチャーを作るベトナムのクリエイター達と共に、これからの都市と私たちの生活の在り方を考えました。約2週間の滞在の間、神戸の町や西村組の拠点からインスピレーションを得ながら、それぞれが一つずつの作品を制作・発表しました。

場所：Baison Gallery（神戸市）
期間：2023年11月
パートナー：西村組、観光庁「歴史的資源を活用した観光まちづくり推進事業」
参加アーティスト：Cécile Ngọc Sương Perdu（デザイナー）
Simon Phan（グラフィックデザイナー）
Dương Gia Hiếu（アーティスト）
Jo Ngo（ビジュアルアーティスト）
Ngô Đức Bảo Lâm（建築家）
デザイン：テラダヒデジ
HP：https://haioku-air.studio.site/

ベトナムから来たアーティストたちと、神戸中をひたすら巡る。良いところも、悪いところも、フラットな目線で見てもらう。

滞在拠点となった西村組の拠点・バイソンで、それぞれが制作に勤しむ。

それぞれが思い思いのまま空間を使うことのできる、豊かさと自由さ。神戸だからこそ実現できたプロジェクトかもしれない。

滞在中、毎晩必ず同じ釜の飯を囲むことで、みんなが家族のようになる。国境を越えた家族は強い。

PROJECT EPISODE

「こんなに空き家が多いのに、なんで日本に来るのはいまだに大変なの？」
廃屋建築集団・西村組と一緒に神戸中の打ち捨てられた空き家を訪ねた。その時にベトナム人アーティスト・Hieuが発したとてもシンプルな質問に、私たちはうんうんうんと、頭を振る。招いていたベトナム人アーティスト5名のうち2人には、日本の入国ビザが降りなかった。
経済成長と人口増加が続き、これからの可能性にはち切れんばかりのベトナムで、“明日は今日よりも良くなる”と信じている若者たちには日本の町はどう映るだろうか。
彼らのメガネを、私たちも借りてみる。

CASE STUDY5

もったいない食堂

OVREVIEW

伝統的な暮らしが香る
台北の都市「萬華」を舞台に行った、
フィールド調査と新規ツアープログラム開発

伝統的な市場や、都市文化を保存するための活動を行う台北・萬華地区のU-mkt。彼らが毎年行っているエキシビションの前段階として行われたフィールド調査と、調査を元にしたツアー開発のためのアーティスト・イン・レジデンスにfor Citiesが参加しました。市場を取り巻く「食」をテーマに、台湾内外から訪問する食のクリエイターや、シェフが市場の食材を使ってその日限りの食事会をひらくプログラムを考案。

場所：U-mkt（台北・萬華）
期間：2023年9月
パートナー：ロフトワーク／U-mkt

久しぶりの台湾は相変わらず活気で満ち溢れていて、食欲と好奇心を抑えきれず街中を駆けずり回る我々。

良い出会いが生まれたワークショップ。後日日本で会ったり、コラボレーションに繋がったり、その後も続く出会いがあった。

大好きな街に、小さくても、何かしらの貢献が残せることほど嬉しいことはない。

我々が提案した「もったいない食堂」のアイデアは、展示を通して色んな人に知ってもらうことができた。

PROJECT EPISODE

台湾に来ると、行きたい場所、食べたいご飯、会いたい人が飽和状態でくらくらする。今回、私たちが迷い込んだ東三水市場も、なんとも情報過多でくらくらする。

量り売りの卵屋さんには、何種類もの卵が売られていて選びきれない。

はち切れんばかりに野菜を並べたお店のカウンターには、なぜかどでかい犬が誇らしげに立っている。

このマーケットのすぐ横で居酒屋を経営する友人の政道君は、カオスを前に「これが台北」とドヤ顔で笑った。そんな“台北”が凝縮されたこのマーケットは、日本から来た私たちができることは何かを突きつけてくる。

for Citiesの

あつまり、つなげる

FOR CITIES WEEK

これからの都市を考えるための展覧会

さまざまな人が暮らす都市には多様性がある一方で、ともすれば普段の交友関係から抜け出せず、新たな出会いが少なくなってしまうこともあります。しかし、交友関係が広がり「多様な人があつまる」ということは、それだけで大きなうねりを生み出す力があります。
for Citiesはオンラインやオフラインさまざまなチャネルを通じて、枠にとらわれずに人があつまり、交流するための機会をつくります。あわせて、仕組みやツールをつくることでそうしたあつまりが継続し、また誰しもが活動をスタートできるような仕掛けの構築を目指します。

CASE STUDY1

FOR CITIES WEEK 2021
TOKYO KYOTO (JAPAN)

OVREVIEW

世界中の都市生活者による
これからの都市を生きるためのアイデアの祭典

これからの都市を考えるための実践を学び、体験できる移動型展覧会を東京、京都の2拠点で開催しました。コロナ下で制限もある状況のなか、国外からも作品やアイデアを集い、全10ケ国のメンバーが出展者として参加をし、各拠点で1週間ずつ展覧会を実施。、「自分たちの手で都市の暮らしを作っていく」をテーマに互いの実践知を交換・検証・実践しました。
5つの常設展示に加え、ワークショップ、トークセッション、夜の街歩きツアーなどを実施。常設展には、ベルリン在住イラストレーターのニッパシヨシミツや、ミャンマー、マレーシア、中国という3つの異なる国や文化のメンバーで構成される建築デザイナー集団のStudio Pliz、ニュージーランド出身アーティストの作品が並び、世界中の刺激的なアイデアを実感できる内容となりました。

場所：ニシイケバレイ（東京都・池袋）／Bridge To（京都市）
期間：2021年10-11月
パートナー：ニシイケバレイ／11-1 Studio／Bridge To
後援：ニシイケバレイ、濱口商店、ホホホ座、クラウドファンディングで応援してくださった方々
会場構成：No Architects
グラフィックデザイン：河ノ剛史、根子敬夫
助成：国際交流基金アジアセンター・アジア・市民交流助成
—
出展メンバー
Chris Berthelsen / Eugene Soler / Rik Stabel / 北 澤 潤 / MAINTENANCE CLUB / ニッパシ ヨシミツ / NIKAWA / 中村元気（NPO法人530Week）/ Prisca Arosio, Melita Studio / Playfool/Ralph C. Lumbres / REPIPE / RF Records / Studio Pliz / 桜三丁目 / 山口純 / X TRAIN

京都の会場では、入口にアーティストのEugene Solerによるインスタレーション作品「Invisible in Visible」の展示を設置。住宅街に人々を誘う不思議な違和感を投入した。

「多様な背景をもつ人たちと、まちをポジティブにディスりながら歩く」Ugly Building Tour。池袋や京都も街を夜な夜な練り歩いて多様な価値観を交換しあった。

インドネシアの人力タクシー「ベチャ/Becha」をモチーフにした、美術家・北澤潤による作品が池袋の街中を走り抜ける。

展示のエントランスには、世界中から集まった街を面白くするアイテムや冊子をキュレーションして販売。forcities.orgにあつまった世界中のアイディアも展示した。

PROJECT EPISODE

私たちも「まちづくり」という言葉を聞くと、なんだか、私ではない「誰か」がやってくれる、以前はそんな距離を感じてしまうことがあった。
でも、与えられた空間を便利に生きるだけでなく、自分のまわりの環境を創意工夫しながら充実感のある風景に変えていきたい。
この場所は、そんな想いで活動する世界中の都市生活者によるこれからの都市を生きるためのアイデアの祭典。一つひとつの取り組みがそうした想いが活動の始まりにあることを思い出させてくれた。

CASE STUDY2

FOR CITIES WEEK 2022
CAIRO (EGYPT)

OVREVIEW

地域の価値を
サウンドスケープの視点から掘り起こす
フィールド調査と、展覧会

エジプトの総人口の約9割が集まると言われる大都市・カイロ。この街をベースに活動する都市デザインスタジオ「Cluster」と共に、ワークショップと展覧会開催を実施しました。人口過密に伴い首都機能も飽和状態になり、砂漠の中に新首都の構築が進んでいるエジプト。人口減少が進み、徐々に地方への移住者が増えつつある日本とはまったく違う現実の都市を舞台に、Ard El Lewa地区の1ヶ月間のフィールド調査と、1週間の展覧会を開催しました。

場所：カイロ（Ard El Lewa地区）
期間：2022年7-8月
パートナー：Cluster・Fablab・GIS friends
写真：Ebrahim Bahaa-Eldin
キービジュアル：Musa Omusi

CONCEPT

「都市の音風景 - Soundscape」

立体や建築物をつくることが得意なClusterと、目に見えない感覚的なデータをまちづくりに活用する視点を持ちこんだfor Cities。それらをうまく掛け合わせて、これまで見えてこなかったローカルの魅力や関係性を可視化することに挑戦しました。

1. Soundmapping / 音風景からエリアの価値を可視化する
2. Sound Donation / 街に音を寄付するデザイン
3. Kids Workshop / 子供たちと共に音風景を表現する
4. Urbanist School / 音の地図データを可視化する
5. Dreaming in Ard El Lewa / 街の主題歌をつくる
6. Urbanist Kit / 学びのツール開発

地域の子どもたちと共に行ったワークショップ。子どもの視点から、まちの音を拾い、まちの音風景を可視化した。

展示の舞台は、カイロの中心地から15分ほどいった住宅街の中心地。現地のFab Labの施設を借りて地域に開きながら活動を行った。

forcities.orgのコミュニティメンバーでもある、GISの専門家であるElizaがロシアから来日。GISの学びのプログラムを主催した。

現地の建築学生と共に、Soundmappingと称して、地域の音風景（サウンドスケープ）を採集し、地図上に可視化することで、地域の価値を再認識する機会をつくった。

PROJECT EPISODE

砂漠地帯のど真ん中でナイル川にへばりつくような形で広がる人口2,200万人のこの街を、私たち2人は1カ月間、夢中になって歩いていた。

都市化に伴う西洋化の流れはもちろんここにもあって、新しくできたばかりの大きなマクドナルドやH&Mが大通りを占領し始めているのも事実だ。けれど一本裏道に入れば、昔から続く、人々の生活の風景がある。

朝だけストリートに出現し、勤務前のワーカーで群がる立ち食い朝ごはん屋台。カラフルな衣装に、手作り感のある手押し車で水やジュースを売りさばく男性たち。そこらじゅうをウロウロする、野生の猫と犬。

私たちが好きなのは、そんな多様で混沌とした人々の日々の営みだった。

CASE STUDY3

URBANIST CAMP, FOR CITIES WEEK 2023
HO CHI MINH CITY (VIETNAM)

OVREVIEW

多様性のあるアジア諸都市を繋げ、オルタナティブな都市の未来を描くための滞在と制作

人口増加の続くベトナムは、2023年に総人口1億人を超えると言われています。しかし、超高層ビルや巨大インフラが次々と建設されることでさまざまな都市問題も発生していて、年々増え続ける大量のバイクによって起きる大気汚染や交通渋滞はその代表的な一つ。一方で、それらを逆手に取ったユニークな取り組みや、若者たちによるシーンの盛り上がりも活気を見せています。
「Urbanist Camp」プログラムは、そんなベトナムを舞台に、公募を通じて日本とスペインから集まった12名のアーバニストと、1ヶ月間の共同リサーチを実施するというもの。現地の建築スタジオ「studio anettai」やアートスペース「UOM art hub」、現地のクリエイティブシーンを牽引するリソグラフスタジオ「OHQUAO」と連携し、フィールドリサーチの発表の場として展覧会「for Cities Week 2023」を企画・開催しました。

📍 場所：ホーチミン
📅 期間：2023年5月1日-29日
👫 パートナー：Studio Anettai / UOM art hub
協力：Ohquao / Inrestudio / The Lab Saigon / Takashi Niwa Architects

CONCEPT

新たな視点で街を見るための12の作品

多様なバックグラウンドを持つ12名の参加者たちが自ら研究テーマを設け、フィールドツアーやスタジオ訪問、for Citiesチームとのディスカッションを通じてリサーチを行い、最終アウトプットとして、リサーチブックを現地のリソグラフスタジオと共に制作し展覧会を行いました。

Week1: フィールドリサーチ
Week2: 拠点訪問・インタビュー／展覧会企画設計
Week3: 展覧会準備・制作
Week4: 展覧会：for Cities Week 2023開催

活動拠点と展示会場としてコラボレーションした、UOM art hub。10代〜20代の若いクリエイティブ層の集まるクリエイティブスペース。

国内外から公募で集まった参加者たちと共にシティツアーを実施。建築物をめぐるプログラムやオフィス訪問なども実施。

「まちの色」「女性たちの都市体験」「夜遊び」「モビリティ」など、参加者それぞれがテーマをもってホーチミンの今をリサーチ。現地のリソグラフスタジオOQHUAOと共にZINEとして編集印刷して発表。

会期中はさまざまな人が会場を訪れた。リサーチを通じてでてきた、よそ者としての視点をきかっけにさまざまな議論を行った。

PROJECT EPISODE

「今日より明日は、きっとよくなる」ここホーチミンは、そんなムード漂う熱気に満ちた街だった。
平均年齢30歳のベトナムでは、今日考えたことが次の週には何かしらの形になっている。
そんなスピード感と創造力がうごめくことの街で、私たちは、日本とスペインから集まった個性豊かな12名のアーバニストたちと共に、ホーチミンの「今」を切り取った。
日々、行き着く間もなくさまざまな人に出会い、場所を訪れ、おいしいものを食べ尽くし、全力で遊ぶと、次第にクラクラするほどの毎日が愛おしく、やみつきになってくる。
そんな1ヶ月だった。

for Citiesの

ともに、まなぶ

URBANIST IN SCHOOL

都市を楽しみ、
使いこなす人のための学び場

都市を作品として多くの人にひらいていくためには、都市や場だけでなく、それらに介入する誰かが大切です。そして、彼らが一歩踏み出すために、学ぶための場所や機会が欠かせません。
多様化し、課題がより複雑になっていく都市の未来を考えていくためには、分野横断的に活動できるスキルや知識が求められます。そのために、都市を捉えるために必要なさまざまなテーマとスキルを、座学（Lecture）と実技（Studio）を組み合わせたプログラムを通じて実践的に学ぶ機会を作ります。

CASE STUDY1

SMELLSCAPE TOUR

OVREVIEW

「嗅覚」で街を読み解くと、立ち上がる都市の風景とは？

「“香り”で世界の解像度は上がる」をテーマに活動するクリエイティブチーム「混ぜるな危険」と、for Citiesがコラボレーションし「香る身体」を拡張するための街歩き・スメルスケープ・ツアーを開催。香ばしいコーヒー屋の匂い、雨が降った後のじめっとした匂い、春が訪れて心躍る匂い。目に見えないこの感覚を、言語化し表現する方法や、街を捉える手法として活用するための街歩きツアーを、京都のアートイベント「KYOTO FRAGMENT ART PROJECT」の参加アーティストとして企画・実施。
同時に、記憶や感情と密接に結びついている「嗅覚」が空間環境に果たす役割に着目し、「好き嫌い」「湿度」「人工物」「自然物」「懐かしさ」「思い出」など、香りという極めて主観的な情報をあえてパブリックデータとして記載し、アーカイヴする実験を行い、インスタレーションの制作・展示を円山公園音楽堂にて行いました。

📍 場所：京都市
📅 期間：2023年3月19日
👫 パートナー：混ぜるな危険／LE SILLAGE FRAGRANCE
運営事務局：KYOTO FRAGMENT ART PROJECT
共催：京都市

無機物・有機物、それぞれの匂いを嗅ぎ分けてみる。季節や天気によって、香り方は大きく変わる。

匂いを図式や色で表現したり、立ち上がる感情を書き留めたり、教材をガイドに忙しく鼻を使う。

綺麗に手入れをされている円山公園は9割いい匂いがする。深夜の繁華街や駅裏の路地を匂いからリサーチしたら、どうなるのか。

香りという抽象的なものを、具体的に数値化し、視覚化してみるという実験。

PROJECT EPISODE

「円山公園でほふく前進をしたら怒られますかね？」
初めてのミーティングの最中、混ぜるな危険のメンバー・ゆうじ君に聞かれた。2023年に聞いた質問のなかで、ダントツにとぼけている。けれど、聞いた本人は至って本気だった。匂いを嗅ぐという人間の身体的な行為は、視覚や味覚ほど注目されることが少ない。けれど、意識一つで、私たちはもっと“嗅ぐ”ことができる。
3ヶ月間、円山公園に通い詰めて“香りの採集”をした私たちは、冬から春への季節の移行を、初めて匂いを通じて体験することができたのだった。

CASE STUDY2

ANIMAL SCALE CITY VOL.1

OVREVIEW

都市における動物たちの存在を考える、“アニマル・スケール・シティ”のための実験

「考える人の、旅。」をコンセプトに山梨県富士吉田市で展開する都市と地域をつなぐ体験型プログラム・SHIGOTABI。そのなかの一つの取り組みとして、座学と実技を組み合わせた学びの場『Animal Scale City』を開催しました。昨今のまちづくりでよく耳にする、“ヒューマン・スケール・シティ”という言葉。そうした人間中心的な考え方から脱却し、多様な生物たちも含めた“アニマル・スケール・シティ”のアプローチを模索するワークショップシリーズの第一弾として、馬と共に富士吉田の街を歩き、参加者と一緒に馬のためのオリジナルマップを制作しました。

場所：富士吉田（山梨県）
期間：2023年2月
パートナー：Saruya Hostel／SHIGOTABI／富士吉田市

富士山の麓に広がる富士吉田市ではかつて、山の麓である上吉田と、さらに下手の住宅街である下吉田を繋ぐ存在として、馬が重要な役割を果たしていた。

固いアスファルトの道路をおっかなびっくり歩く馬が、雨上がりということもあり、金属の蓋をした排水溝の上で、足を滑らせる。

馬が田畑を耕したり、荷馬が登山者や荷物を運ぶ物流、そして神事行事などでも馬が活躍していたという。

今、私たちが住んでいる街は、人間のためだけにデザインされすぎてはいやしないだろうか？ さまざまな問いを議論する。

PROJECT EPISODE

ケニアとソマリアの間にある、ロバだらけの離島に行ったことがある。
人間と同じくらいの数のロバがいるのではというその島では、子どもは近所の家に遊びに行くためにロバに乗り（歩くより遅い）、配達もロバでする。大体の家の前には水飲み場が設置されているし、道路はロバが歩きやすいようにコンクリートで舗装されていない。
日本の町にもかつては、馬や牛など、多くの動物がいたはずだ。今、私たちが住んでいる街は、人間のためだけにデザインされすぎてはいやしないだろうか。
富士吉田で、雨上がりのアスファルトにおっかなびっくり足を滑らせる馬と一緒に街中を歩いていると、そんなことを思った。

CASE STUDY3

URBANIST SCHOOL #1 TOKYO RHYTHM ANALYSIS

OVREVIEW

視覚情報、体感、心身の状態に頼り、都市の“リズム”を知るための学び

フランスの哲学者アンリ・ルフェーブルは、遺書『リズム分析の要素----リズム認識序説』のなかで、“リズム”という概念を介して「身体」を「空間」と「時間」と関係させ、都市を多角的に読み解く手法と意義を説きました。そうした手法を参考に、次世代のアーバニストを育てるための学びの場、アーバニスト・スクールの第一弾として、、都市音楽家の田中堅大氏を案内人に、「LECTURE：街のリズムの採集」「STUDIO：音風景の即興的な制作」を実施。都市におけるリズム分析の手法を実践的に学びました。

場所：池袋（東京都）
期間：2022年3月
パートナー：11-1 Studio
助成：東京都「アートにエールを！ 東京プロジェクト」

講師として招いた田中堅太くんは、「都市音楽家」という不思議な名前の持ち主。

池袋の街に参加者を放つ。教材を片手に、都市の音に迷ってもらう。

音を形や色で例えると？ 耳の準備運動をしたあとは、今まで答えたことのない問いに向き合う。

音、映像、リズム。全てを組み合わせて参加型のパフォーマンスを行った。

PROJECT EPISODE

都市環境音楽家の田中堅大くんは、「田舎の鳥や虫は、都会に比べて頑張らなくてもいいから、比較的静か」と言っていた。
車の音や信号機の音にかき消されないように、都会に住む彼らは必死らしい。音を通して、私たちが理解できることは、予想以上に多いようだ。
全ての音は、リズムと共にやってくる。
電車のリズム、道を行き交う人々のリズム、そして、季節のリズム。リズムの採集・記録方法にはコツと集中力がいる。教材を使って、参加者と東京のリズムを読み解いていく。

CASE STUDY4

SPATIAL SOUND OF CAIRO

OVREVIEW

音と地図を結びつける、最新のデータテクノロジーとアートを用いた地図の製作実験

音と地図を結びつける、最新のデータテクノロジーとアートを用いた地図の製作実験
地図情報管理システム「GIS」をテーマに、ロシア・モスクワからGISスペシャリストを講師に招いて行った1週間の集中ワークショップ。フィールドリサーチ、データの収集、QGISの基本操作のレクチャー、空間データのマッピング、データビジュアライゼーションなど、市の音データを分析し、視覚化し、コミュニケーションするためのサウンドマップを、参加者それぞれが作成・発表しました。

場所：カイロ（エジプト）
期間：2022年7月
パートナー：cluster / GIS friends

ストリートに半開きになった空間で朝から晩まで議論し、フィールドワークに出かけ、パソコンを睨み、手を動かす。第二外国語である英語を操りながら、文化の違いを超えて何かに一緒に取り組むことへの快感。

デジタルファブリケーションのスタジオがあったおかげで、地図の出力も、教材のレーザープリントも自由自在。

カイロのなかでも一際ローカル感のある
Ard El Lewaでは、誰もが気軽に路上を
使いこなしている。

集まったデータと制作したマップを展示。
一日の違う時間帯にあわせた"音の提案"
も、インスタレーションとして発表。

PROJECT EPISODE

「え、カイロでワークショップするの？ じゃ、行こうかな」
そんな気軽なノリで、ロシアからfor Citiesのコミュニティメンバー・Elizaveta Belyakovaが駆けつけてくれた。コミュニティプラットフォーム「forcities.org」のメンバーである彼女は、得意のGISを使って、海外での活躍の舞台をちょうど探していたようだ。ロシア人と、日本人と、エジプト人が、カイロの外れのインフォーマルなエリアに集まって、わちゃちゃと一緒に何かやっている感じ。そうそう、こういう風景を生み出すのが、私たちは好きなのだ。

CASE STUDY5

SONIC FICTION WORKSHOP

OVREVIEW

ナイロビで採集した音と、他都市の音を混ぜ合わせ、架空の都市を一緒に想像するためのワークショップ

国を超えて、ソニック・アーバニズム、サウンドスケープ、リズム分析の基礎を学ぶワークショップに取り組みました。ケニア・ナイロビで開催されたキックオフワークショップでは、世界中のさまざまな都市の音を交換し、サウンドをつくることで、「架空の都市」というフィクションを生み出すことをコンセプトにワークを実施。アーティストやサウンドクリエイターなど、さまざまな参加者との交流を実現しました。

場所：ナイロビ（ケニア）
期間：2022年6月
パートナー：Sound of Nairobi

「架空の都市」というニッチなテーマにどれだけ人が集まるかと思いきや、キレッキレのアーティストたちがやってきて刺激的だった。

日本とケニアの音を交換してみたら？ というディスカッションで盛り上がる。

ナイロビのアップカミングなエリア、Westlandを、教材として用意されたミッションを片手に歩く。普段は危険地域としてあまり人が歩きたがらない地域。

都市環境音楽家・田中堅太くんの映像インスタレーションを、ナイロビのオルタナティブスペースで展示。

PROJECT EPISODE

ナイロビという街を“音”という視点で都市を切り取るガイドマップを制作しているアートコレクティブ、Sound of Nairobiとの出会いが私（杉田）のケニア滞在のきっかけだった。毎週金曜日の夜は、彼らが運営するモールの地下にあるコンクリート打ちっぱなしのスペースに入り浸り、現地の若者たちによる実験的な音楽やパフォーマンスを見た。

1ヶ月の滞在期間は、サウンドスケープをテーマに、ケニア在住の多くのクリエイターたちとディスカッションやワークショップを行う機会になった。

CASE STUDYG

ANIMAL SCALE CITY VOL.2

OVREVIEW

“動物たち”を街に誘致する映像作品づくり

富士吉田で行った『Animal Scale City』の第二弾は、NHK番組「ダーウィンが来た！」ディレクターの足立泰啓さんをゲストに迎え、“人間以外の存在”を見つけるための町歩きのコツを教わりました。伝授してもらったのは、動物・昆虫・植物などさまざまな生物を見つけ、観察する手法と、NHKでの経験をもとにしたそれら生き物の姿を映像として記録し、生き物にまつわるストーリーを共有する手法。参加者には、グループでスマートフォンで撮影した映像で動物を富士吉田に誘致するためのCMを作成してもらい、富士吉田市の新たな視点の観光コンテンツとして発表してもらいました。

場所：富士吉田（山梨県）
期間：2023年11月
パートナー：SHIGOTABI／Saruya Hostel

生物がよくいるのは、建物の上、橋の下、何かの隙間らしい。側から見ているとなんともシュールな街歩きだ。

私たちには最初何も見えなくても、慣れている人の目にはわんさかいる、“人間以外の存在”。

東京から片道2時間もせず来れてしまう富士吉田だからこそ、東京からの参加者も多い。

冬はあまり生物がいない……と思いきや、ちょっと暖かそうなところに、隠れている。

PROJECT EPISODE

穴のなかや、橋の下、石や植木鉢の下。そして、木や建物の上。狙った生物を撮影するためにときには何時間も待ち伏せしたりすることもあるという。何度もそんな経験をしているNHK番組「ダーウィンが来た！」のディレクター・足立さんに、生き物を見つけ、撮影するためのコツをいくつか教わった。
人間にだけではなく、動植物などの生物にも魅力的な街のあり方が、映像を制作することでよりリアリティをもって迫ってきた気がする。

for Citiesの

記録し、とどける

PUBLICATION

都市の物語の発信と、記録

都市では、日々多くの物語が生まれ、また誰かに知られることなく消えていきます。しかし、そうした取るにたらないと扱われてしまう小さな物語こそが都市の輪郭を描き、また私たちに都市に介入するヒントを与えるものだとfor Citiesは考えています。
そうした都市や物語を一つひとつ「異なる固有のものとして受け止め」、また「比較」することができるよう、“よそ者”の視点で、その土地や風土の魅力を編集し届けていきます。

CASE STUDY1

SARUYA POSTER MAGAZINE

OVREVIEW

富士吉田という街にアーバニストを呼び寄せる、ツールとしてのマガジン制作

地域の人だけでなく、「よそ者」として近郊都市からさまざまな才能をもつ個人をこの街に誘致したいという、SARUYA HOSTELオーナー・八木毅さんの想いから、山梨県・富士吉田市にあるSARUYA HOSTEL / SARUYA ARTIST RESIDENCYと、ポスター形式のシリーズマガジンを制作。毎回異なるアーティストやクリエイターとコラボし、この街を表現したポスターとこの街の使いこなし方や視点を凝縮したコンテンツで構成しました。

場所：富士吉田（山梨県）
期間：2022年5月
パートナー：SARUYA HOSTEL

Saruya Poster Zine vol.1
「富士山の麓の小さな街へ、クリエイティブの息吹が渦巻く拠点を尋ねて」

SARUYA HOSTELの創業者・八木毅へのインタビュー他、SARUYA ARTIST RESIDENCYの過去の滞在アーティストによるエッセイ、オーストラリア出身のイラストレーター・Billy Clarkによる富士吉田の書き下ろしイラスト作品などを収録。

Saruya Poster Zine vol.2
「地方都市こそ介入の余白がある『街がこうなったらいいな』を考える」

富士吉田の街を面白くする6つの“妄想”を、イラストレーター・川合翔子のポップな作品と共に紹介。東京大学大学院准教授・中島直人氏のエッセイ「上吉田と下吉田、その折り合わせが生み出す可能性」他、富士吉田の妄想マップを収録。

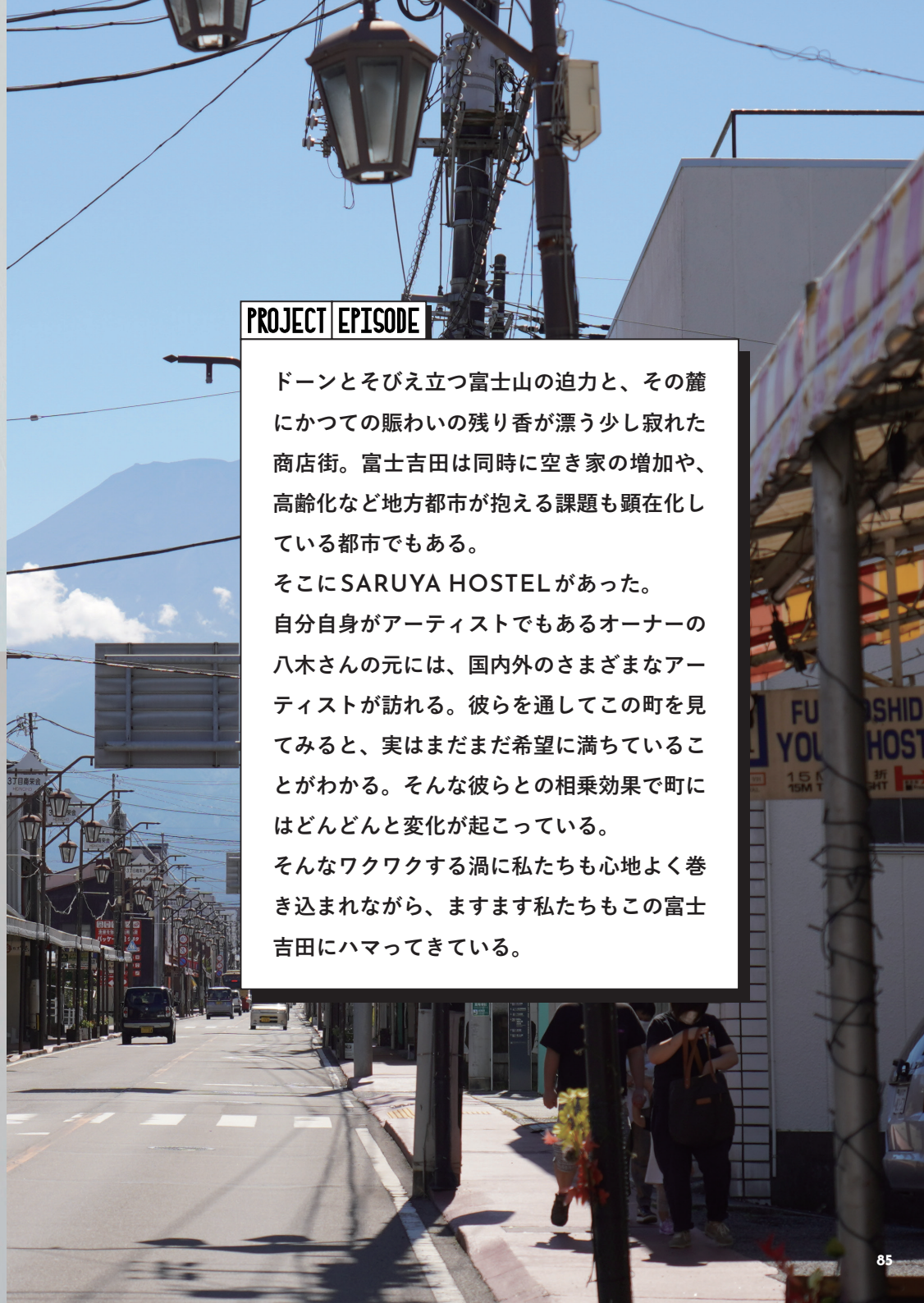
Saruya Poster Zine vol.3
「都市環境音楽家と巡る、山梨県・富士吉田市のサウンドスケープ」

都市音楽家・田中堅大と共に、「音」をテーマに富士吉田の街を歩く。イラストレーター・渡辺明日香の幾何学的な作品と共に、音が織りなす色とりどりの風景を、実際の街のサウンドレコーディングと共に紹介。田中堅大へのインタビューと共に、都市とサウンドデザインの可能性も議論しました。街から集めた音をベースに、オリジナルの楽曲も特別収録。

各号のテーマに応じて、国内外のクリエイターに書き下ろしてもらったビジュアルがポスターになるような仕掛けを。

第一弾のポスターは、SARUYA HOSTELの窓から見える景色をオーストラリア出身のクリエイターに書き下ろしてもらいました。

やわらかく朝の光が入り込むSARUYA HOSTELの一コマ。私たちが心を奪われた瞬間の一つです。



PROJECT EPISODE

ドーンとそびえ立つ富士山の迫力と、その麓にかつての賑わいの残り香が漂う少し寂れた商店街。富士吉田は同時に空き家の増加や、高齢化など地方都市が抱える課題も顕在化している都市でもある。

そこにSARUYA HOSTELがあった。

自分自身がアーティストでもあるオーナーの八木さんの元には、国内外のさまざまなアーティストが訪れる。彼らを通してこの町を見てみると、実はまだまだ希望に満ちていることがわかる。そんな彼らとの相乗効果で町にはどんどんと変化が起こっている。

そんなワクワクする渦に私たちも心地よく巻き込まれながら、ますます私たちもこの富士吉田にハマってきている。

CASE STUDY2

REGENERATIVE COMMONS
場所と地球がつづくための関係づくり

OVREVIEW

これからの社会のキーワード「リジェネラティブ」とは何かを、自分ごととして考えるための学会誌の編集・制作

東京大学連携研究機構不動産イノベーション研究センター（CREI）が主宰するリジェネラティブ・シティリージョン・フォーラムの内容をまとめた学会誌の企画・編集を担当しました。学会誌という既存の枠にとらわれず、「リジェネラティブ*」という概念を多様な人たちと考えるためのツールとして、国内外の実践者へのインタビューや現地視察などを通じて形づくりました。

*人間も自然の一部と捉える社会生態システムの回復・繁栄を企図し、システム思考や継続的な活動に寄与する多主体間の協働関係の構築を重視すること

📍 取材先：神戸／岐阜／ドイツ／アメリカ
📅 期間：2023年3月〜9月
発行：中島弘貴／城山英明 / 東京大学連携研究機構不動産イノベーション研究センター（CREI）
執筆：富井雄太郎（millegraph）／井口奈保
デザイン：阿部航太

表紙の写真は、私たちが訪れた飛騨高山の材木置き場。官民連携で地域の間伐材を循環させる取り組みである、活エネルギーアカデミーEnepoの活動を取材した。

国内外のさまざまな実践者へのインタビューを実施した。

活エネルギーアカデミーEnepoは、森林の環境保全と里山の暮らしを次世代に継承することを目的とした、地域循環型経済システムとその実践活動。飛騨高山市へ取材に。

PROJECT EPISODE

いつからだろう、私たち人間の営みが大地とのつながりを失っていってしまったのは。そう考えさせられるシーンがこのプロジェクトを通じていくつもあった。

「茅葺に関わっていると、リジェネラティブというのはごくあたり前のこと」

そう語るのは、神戸を拠点に活動する茅葺職人の相良育弥さん。生活のなかで大量に手に入る植物であるススキや稲藁を利用して、自分たちの家をつくる。とてもシンプルなかつての当たり前だった知恵が、一周回って現代の最先端として注目されている。

横文字にされると、なんだか手触りのない概念に思えるが、これは私たちがこれまで当たり前にやっていた、ごく普通の環境との対話方法なのだ。

CASE STUDY3

アムステルダム / よそ者としての都市

OVREVIEW

「よそ者」としてだから見出せるまちの価値。アムステルダムへの置き土産として制作した自主出版のZINE制作

本誌は、for Cities発足のきっかけとなった2020年9月〜11月に私たちが滞在したアムステルダムでの活動記録と観察の一部をまとめた冊子です。自分たちが関わった街に何かしら「置き土産」をできないか、という思いから制作しました。デザインは、アムステルダムの雑貨屋でポスターを見つけて一目惚れをしたイラストレーターのRik Stabelと、レコード・レーベル「Format Wars」の紹介で出会ったデザイナーのEmiliano Quintana。オランダで出会った実践者の活動や場所の観察記を、この冊子に詰め込んでいます。

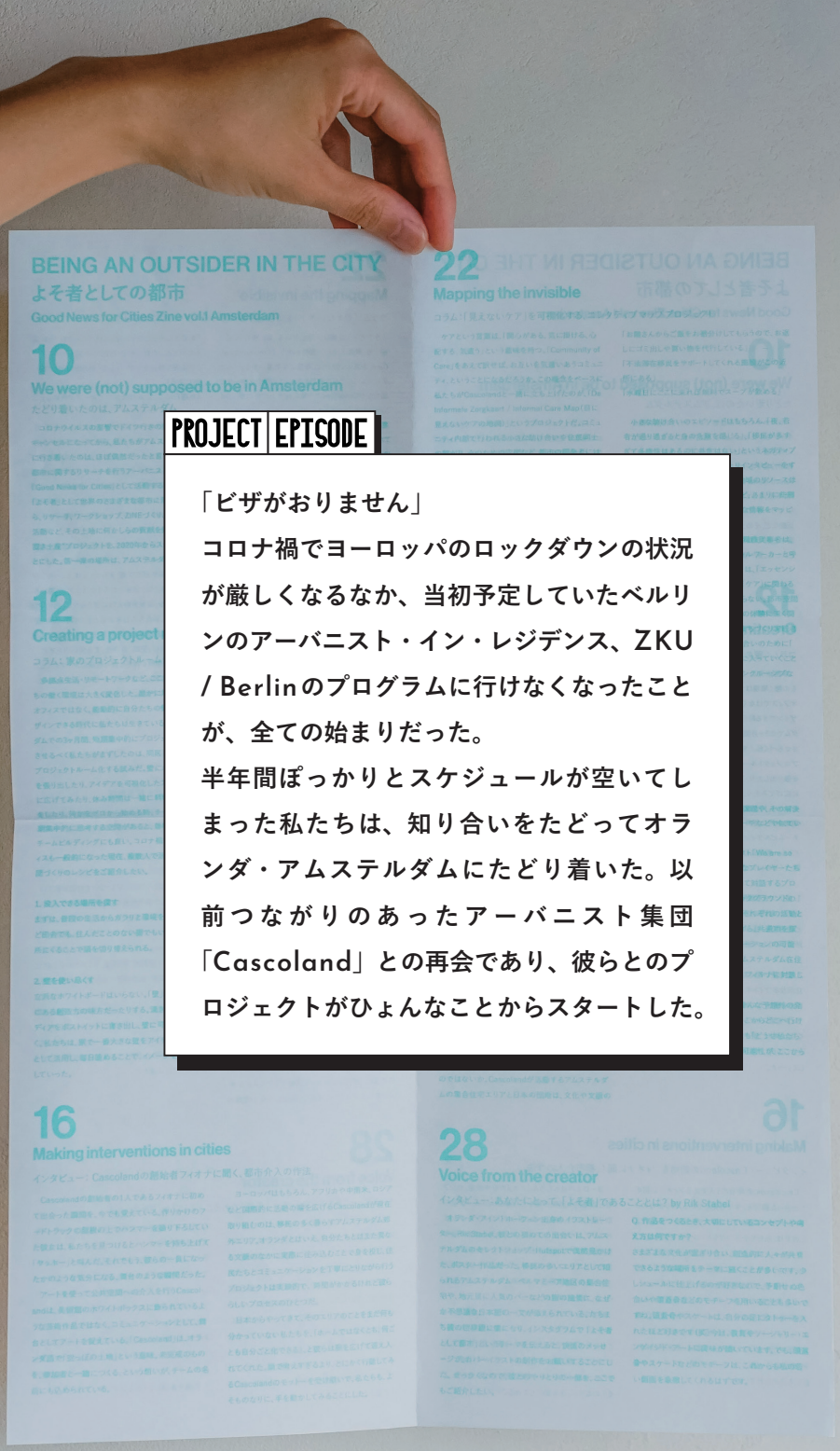
場所：アムステルダム（オランダ）
期間：2020年9-11月
パートナー：Rik Stabel / Emiliano Quintana / cascoland / 根津幸子 / 木原共 / Trust in Play
イラスト：Rick Stabel
デザイン：Emiliano Quintana
協力：Cascoland、根津幸子、木原共、Trust in Play

表紙のイラストレーションは、私たちがオランダで活動していた、移民街のパン屋の風景を。

コラボレーションパートナーは、現地のセレクトショップで一目惚れしてDMして仲良くなった、オランダ人のクリエイターRik Stabel。現地で繋がった海外のデザイナーにお仕事を依頼する、という経験にも繋がった。

私たちが多大な影響を受けたアーバニストチームCascolandのインタビュー。アートを媒介とした都市介入の実践を国内外で行っている。

200冊限定の私たちの最初の出版物であり、アムステルダムへの私たちからの置き土産となった。



PROJECT | EPISODE

「ビザがおりません」
コロナ禍でヨーロッパのロックダウンの状況が厳しくなるなか、当初予定していたベルリンのアーバニスト・イン・レジデンス、ZKU / Berlinのプログラムに行けなくなったことが、全ての始まりだった。
半年間ぽっかりとスケジュールが空いてしまった私たちは、知り合いをたどってオランダ・アムステルダムにたどり着いた。以前つながりのあったアーバニスト集団「Cascoland」との再会であり、彼らとのプロジェクトがひょんなことからスタートした。

CASE STUDY4

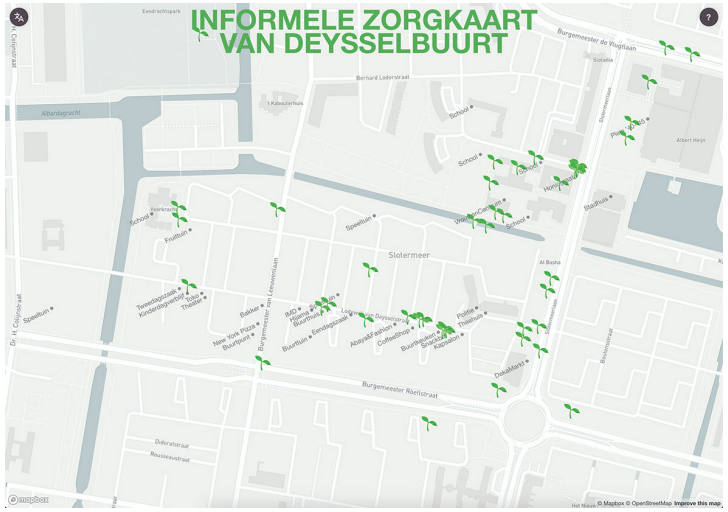
INVISIBLE CARE MAP

OVREVIEW

見えない“ケア”を可視化する コレクティブマップ: De Informele Zorgkaart

「De Informele Zorgkaart（Informal Care Map）」は、アムステルダム滞在中に現地のアーバニストチームCascolandと協働して実施した、コレクティブマップ制作プロジェクトです。舞台は、アムステルダムの西のエリアでモロッコ系の移民が多く住む、Van Deyssel街区。このエリアには再開発に対して、言語や制度の壁でその議論に入り込めていない移民の人たちの現状がありました。そこで私たちは、このエリアに通いながら、ここに存在する見えないケア＝助け合いを可視化する取り組みを行い、再開発の計画者に対して声を届けるための活動を立ち上げました。

場所：アムステルダム（Van Deyssel街区）
期間：2020年9-11月
パートナー：cascoland



WEB上に誰でも投稿できる、コレクティブマップを開発。それぞれの人が大事にしている「ケア」したい場所やそれが生まれるスポットをアーカイブしていきました。

対話モジュールを街中に引っ張りだし、道ゆくひとに声をかけていきました。

道ゆく清掃員の人にもインタビューを実施。

顔馴染みの老夫婦との何気ない会話から、彼らの守りたい場所や大切にしている場所をヒアリングしていきました。

PROJECT EPISODE

少し肌寒い秋晴れの日、私たちはCascolandがつくった街頭インタビュー用の屋台と、あたたかいハーブティ、そして何種類かのキャンディーを準備して、ストリートにくり出した。1時間くらいすると、噂を聞きつけたのか、モロッコ系のパン屋で買い物していた20代の青年が近づいてきた。

「僕たち、同年代で集まって、このまちのストリートの文化を守ろうというグループをつくったんだ」と話す彼。

介入しなくては見えてこなかった、小さな、でも力強い人々のエネルギーがここにはあった。

CASE STUDY5

SONY PARK MINI

OVREVIEW

銀座のまちとの接続点
“インターフェース”を探る、
Sony Parkとのコラボポッドキャスト

関わり方を少しチューニングするだけで、街の使い方や楽しみ方は無限に溢れていく。これまでのそんな実感から、さまざまな人、モノ、コト、文化で溢れる「銀座Sony Park Miniを舞台に、ポッドキャスト「Good News for Cities」が、銀座の街との「インターフェース＝接続点」をテーマに展開するインタビュー番組を企画・制作しました。

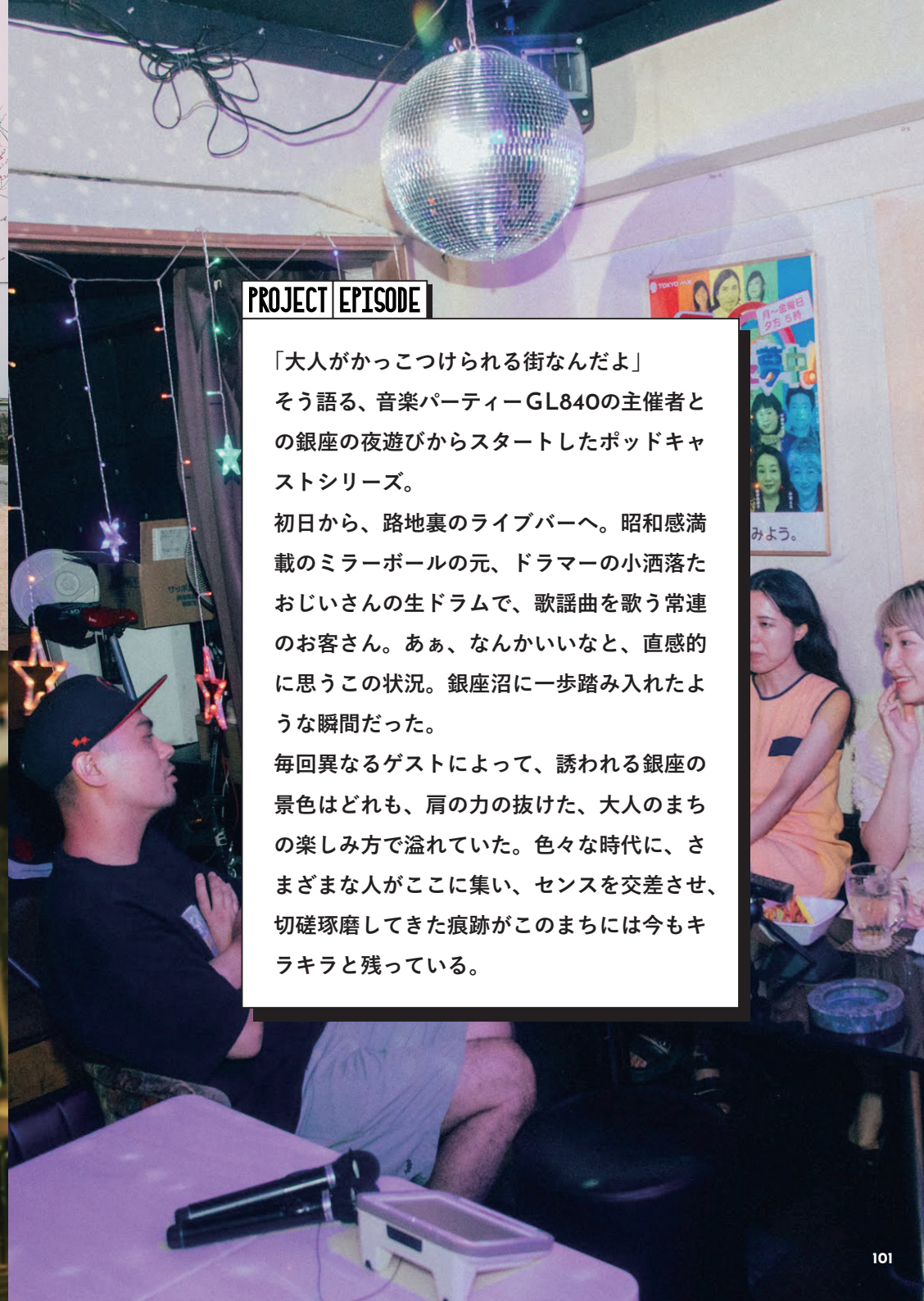
場所：Sony Park Mini（西銀座駐車場地下1F）・銀座の街
期間：2023年5月〜2024年3月
パートナー：Sony Park Mini
デザイン：Slogan Studio
イラスト：ニッパシヨシミツ
協力：木挽町よしや

銀座のパーティーGL840を主催する吉田さんとは夜の街に繰り出しました。「銀座はかっこつけられる街」という後ろ姿に粋な東京の遊び方を教えてもらった一夜でした。

ソニー企業株式会社代表取締役社長の永野さんと歩く銀座は、路地の生活空間でした。

1955年創刊の地域誌「銀座百点」の編集長田辺さんとめぐる銀座。最後に辿り着いたのは、ビルの屋上の秘密の神社でした。

銀座で「1冊の本を売る本屋」森岡書店を営む森岡さんとの街歩きでは、老舗の活版印刷所にお邪魔しました。



PROJECT EPISODE

「大人がかっこつけられる街なんだよ」
そう語る、音楽パーティーGL840の主催者との銀座の夜遊びからスタートしたポッドキャストシリーズ。
初日から、路地裏のライブバーへ。昭和感満載のミラーボールの元、ドラマーの小洒落たおじいさんの生ドラムで、歌謡曲を歌う常連のお客さん。あぁ、なんかいいなと、直感的に思うこの状況。銀座沼に一歩踏み入れたような瞬間だった。
毎回異なるゲストによって、誘われる銀座の景色はどれも、肩の力の抜けた、大人のまちの楽しみ方で溢れていた。色々な時代に、さまざまな人がここに集い、センスを交差させ、切磋琢磨してきた痕跡がこのまちには今もキラキラと残っている。

CASE STUDYG

NOT FAR

「メタボな都市のためのスポーツガイド」

OVREVIEW

都市とスポーツをテーマとした、雑誌の巻頭特集の企画・取材・コンテンツ制作

浜町の工房街に静かな存在感を放つ、Newbalanceのアジアフラッグシップストア「T-HOUSE new balance」。この場が世界に発信する、フリーマガジン「NOT FAR vol.03」の巻頭特集14ページをGood News for Citiesが担当しました。

場所：T-HOUSE new balance
期間：2021年2月〜5月
パートナー：T-HOUSE newbalance / 江口宏志 / 株式会社W
イラスト：ニッパシヨシミツ

目次

- **滑るアムステルダム、浮かぶアムステルダム**
- **都市スポーツ妄想座談会**

  都市全体をスポーツができるための舞台と捉えたら。２人の実践者にヒアリングをしたうえで妄想を膨らませ、ベルリン在住イラストレーターのニッパシさんに一枚絵として表現してもらいました。
- **Parkour Eyes**

  トレイサー（パルクールプレイヤーの総称）には都市がどのように見えているのだろう。パルクールコーチ・山本華歩さんと両国の街を歩きながら、都市のあらゆる要素を遊び場に読み替える彼女の作法と視点を聞いてみた。
- **都市を相手に、ゲームを仕掛ける**

  ウィーンを拠点に、都市空間におけるゲームを開発・実施するクリエイティブチーム・Play Viennaの創業者にインタビューを実施しました。
- **もしも都市が話せたら〜Tくん、バシ先輩、野村さんの場合〜（ラジオドラマ）**

  「もしも都市が話せたら」をテーマに、日本橋のビルたちを主人公にラジオドラマを制作しました。

浜町に蔵を移築してつくったユニークな建物「T-HOUSE」のフリーペーパーである「Not Far」。

パルクールのトレーサーとめぐる、東京のまちの遊び方。

イラストレーターのNIPPASHIさんとコラボレーションして、都市でのありえるかもしれないスポーツ体験を妄想しました。

劇団ぽこぽこクラブ主宰・脚本・演出家の三上陽永さんに書き下ろし、演出をつけてもらった「もしも建物がしゃべったら？」企画。日本橋、高島屋、T-HOUSEという建物たちのおしゃべりをラジオ番組に。

PROJECT EPISODE

両国の川沿いの高速下集合。ここが、彼女たちの練習場。
パルクールのトレーサーの華さんの目線で歩く街歩きは、いつものそれとは全く違っていた。
「私にとっては、塗装のハゲたベンチとか、錆びた手すりとか、そういうのがいいんです。」
なるほど、彼女たちにとっては、グリップの効く年季の入った街のマテリアルが重要で、それを求めて街を転々と練り歩くのだ。
誰も目にもとめないような廃れた公園や空間も、彼女にとっては絶好の鍛錬と遊びのフィールドになってしまう。そんな風に自由にまちを身体化して、軽やかに飛び回る姿をみてうらやましくなった。

CASE STUDY7

無印良品 春のキャンペーン

動画・読み物コンテンツ制作

OVREVIEW

廃屋を譲り受けた一人の青年の、「あたらしい生活」に迫るインタビューコンテンツ

2024年春の無印良品のテーマは、「あたらしい生活」。その言葉を聞いてピンときたのが、廃屋建築集団・西村組で活動するアーティストのNori君でした。西村組代表・西村さんの「廃屋いる？」の一言から、姫路の廃屋を一軒譲り受け、家を作ることから「あたらしい生活」を始めた彼にインタビューを実施。動画とインタビュー記事を制作しました。全国の無印良品で動画の上映、タブロイド冊子の配布がされました。

期間：2023年11月〜2024年1月
パートナー：株式会社無印良品 / 江口宏志
協力：若林のりよし
料理：楠田東輝
写真・映像：山田ゆうすけ

譲り受けた姫路の廃屋。最初は屋根も床も抜けた状態からスタート。

大量にあった中のものを地道に片付け、また使えるものはリサイクルし、徐々に整理をして家が命を吹き返していく。

もともとあった棚をリビングの真ん中に3つ繋げてできあがったオリジナルのキッチンで朝ご飯の準備を。

歩いて5分いったところが彼がこの場所に住むことを決めたこの風景。

PROJECT EPISODE

「廃屋あるけど、いる？」の一言から始まった、Nori君の家づくりのプロジェクト。最初は、「自分のアイデンティティとなるような存在を譲り受けた気持ち」で正直、不安だったという。

その場所は、姫路の海沿いの小さな町中にあった。アメリカから戻ってきて2年。物で溢れかえり、屋根や床にも穴があいた状態からのスタート。でも彼にとって日本中に溢れているこんな廃屋は、課題ではなくプレイグラウンドだったという。

遊ぶように、自分の彫刻作品をつくるように家を形作っていく彼の目には、どんな風景が写っているのか。そんなことに思いを馳せた一時だった。

HOW TO WORK WITH US

QUESTION 1

プロジェクト期間は、どれくらい？

それぞれのクライアントやパートナーに合わせて、
さまざまなプロジェクトの企画・実装に並走します。

1 DAY

都市やまちづくりにまつわる登壇・講演

これからの都市はどうなっていくのか？ 世界の都市はどうなっているのか？ これまでの国内外での経験や豊富な事例知識を活かして、社内研修の講師やイベント登壇などを行います。

1 MONTH

都市のリサーチ、国内外ツアー・視察アテンド

新しい価値や可能性を発掘したいパートナーに向けて、今の都市のトレンドリサーチや、地域リソースの掘り起こしを行います。また、テーマに合わせて国内外のユニークな都市の拠点の視察アテンドをコーディネートします。

3 MONTH

ワークショップの実施、アーバニストスクールの実装、アーバニストキットの制作

さまざまなステークホルダーや地域住民の方と共に、これからのまちを考えるワークショップの実施や、アーバニスト人材の育成を目的とした学びのプログラムの企画・運営を行います。また、参加型のまちづくりのためのツールキットの開発や、生産的観光のためのツールキットの開発も行います。

6 MONTH

レジデンスプログラムの実装、出版物の制作

アーバニスト・イン・レジデンスプログラムの実施、国内外のアーバニストの誘致を行います。また、地域を舞台にした出版物の企画・制作ディレクションも担います。

1 YEAR AND MORE

インキュベーションプログラムの企画・運営、エリアマネジメント

地域拠点と連携した、インキュベーションプログラムの企画・運営、中長期的なエリアブランディングやエリアマネジメントのコンサルティングも行います。

QUESTION 2

for Citiesが得意なことは？

一般的な、プロジェクトのタイムラインに照らし合わせた際に、各プロセスの中でどのように私たちが力を発揮できるのかをご紹介します。各プロセスごとに、担っていくこともできますができるだけ最初の企画・提案から関わることができると、よりプロジェクトの精度をあげていくことができます。

Phase1

プロジェクトの立ち上げ・企画

場の活用アイデア策定、立ち上げまでのプランニング

「forcities.org」を用いたネットワークや国内外の事例を最大限に活用し、新規での場の立ち上げや再開発におけるアイデア出しや実現までのプロジェクトマネジメントを行います。

プログラムデザイン

まちづくり、地域創生、都市デザインなどの分野で、適切なチームを国内外から集め、プログラムの設計・企画・実施までを行います。

フィールド・リサーチ

さまざまな手法・アプローチを用い、プロジェクトやエリアの性質に合わせたオリジナルのフィールドリサーチを行います。インデプスインタビューや参与観察、行動観察などを通じて、エリアの魅力や課題をあぶり出します。

Phase2

コンテンツの制作・イベントの実施や運営

キュレーション・ファシリテーション

都市に関する展覧会やイベント、カンファレンスのキュレーションを行います。また、関連分野のワークショップデザインや監修、当日のファシリテーションも担うことができます。

ツール開発

Urbanist Kitを活用した、観光誘致や地域の魅力を再発掘するワークショップやツアーの企画・実装を行います。

編集、出版事業

都市、建築、まちづくり分野での書籍・パンフレット・Webサイト・雑誌・広報物などの制作を、企画から取材、インタビュー、執筆、デザイン、撮影手配まで一貫してお受けします。

Phase3

場の運営や管理・事業の展開

エリアマネジメント・エリアブランディング

国内外の事例の知識やネットワークや、現場に入り込んでフィールド・リサーチをベースに、市民主体のエリアマネジメントの企画やエリアブランディングのディレクションを行います。

グローバル事業

海外での新規事業リサーチやアーバントレンドのリサーチ、グローバルなチームで取り組むプロジェクトの提案やディレクションを行います。

人材育成

アーバニスト（まちづくり人材）の育成のための、学びの場のプログラムの企画・運営を行います。

QUESTION 3

これまでの実績を教えて！

*2021年から〜2024年現在までの統計です

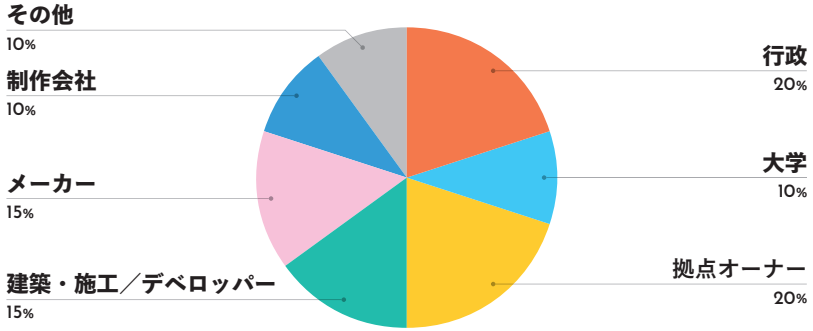
1. これまでにつながったアーバニストの数

5,700人

2. これまでにプロジェクトを行った都市の数

13都市

3. これまでのクライアントのタイプの分類と割合



行政

- 長田区まちづくり課
- 神戸市経済観光局
- 観光庁
- 新潟市

大学

- 東京大学連携研究機構不動産イノベーション研究センター（CREI）

企業（拠点オーナー、ディベロッパー、その他など色々）

- 11-1 studio / Yosuke SAGOSHI Atelier
- 三菱地所株式会社（YAU）
- 合同会社廃屋
- 株式会社ロフトワーク台湾
- Fabcafe LLC
- エイベックス・エンターテイメント株式会社
- 株式会社Psychic VR Lab
- 株式会社DOSO（SARUYA HOSTEL）
- 株式会社VOID
- ソニー株式会社
- 伊藤総研
- 株式会社良品計画
- 福岡地所株式会社

etc……

4. これまでにワークショップや、イベントに参加してくれた人の数

3,500人

5. 活動を始めてからの二人の総移動距離

2人でおおよそ、

650,000km

参考：地球一周の距離（40,075 km）

QUESTION 4

for Citiesとやってみてよかったことは？

for Citiesは毎回、プロジェクトベースでさまざまなクライアントやクリエイターたちと協働しています。
彼らからの声を集めました。

犬童伸浩
—
studio anettai
建築家

for Cities Week 2023

建築未満の事象 “Everyday Material”の発見

Urbanist camp Saigonを2人と併走しながら見えてきた風景は、既知と未知の入り混じる新鮮なものだった。ベトナムの路上にあまねくプラスチック椅子やブリックなどの”ふつう”のモノたちが、1か月を通し熱気と混沌の中で身体化され、新たな意味とともに立ち現れたのである。for Citesと共にそれらを”Everyday Material”と名づけた瞬間から、私たちがこの国で目指すべき思想と態度に輪郭が与えられたように思うのだ。

井上成
—
三菱地所株式会社
エリアマネジメント企画部
担当部長

Urbanist Camp Tokyo X YAU

URBANISTが活躍する未来にエール！

for Citiesへの共感と期待の最大は大勢のアーバニストの輩出。再構築を目指す有楽町を舞台に、半年に亘るURBANIST CAMPで取り組んだ“再野生化”のリサーチでは、問いに向き合う悦びや革新を生むワクワクを通じ、32人の参加者がアーバニストの扉をノックした。有楽町SLIT PARKで素足になって踏んだ土の感覚と雑草の匂い。土中の微生物を語る山崎先生の声。ビルの谷間で五感が解放された夜が今も記憶に新しい。

上村昂平
—
混ぜるな危険 主宰
デザイナー

Smellscape Tour /Map（京都円山公園）/
U-mkt 年次エキシビション2023年

思いがけない鯛の丸焼きと台湾夜市

台湾のプロジェクトにて、for Citiesのお二人と対象地域のフィールドワークをした時のことです。訪れた夜市にて気づけば屋台のおじさんと仲良くなり、良かったらこれを食べてほしい、と鯛の丸焼きをプレゼントされていました。ただ調査をするだけではなく、街に入り込むお二人のフラットなコミュニケーションが印象的でした。

山峰潤也
—
キュレーター
プロデューサー

Kobe Re:Public Art / Urbanist Kit 神戸

都市探査ユニットの見えざる働き

for Citiestの二人と会ったのは、森山未來さんと進めていたKobe Re:Public Artというプロジェクトでした。神戸市の観光事業として始まりましたが、その企画は、単純に目の引くモニュメントを作って観光客を作る、という発想を否定して、地元に根付く面白い活動、場所、人々を、神戸市の人々とアーティストが再発見していき、クリエイティブな関係人口を増やしながら、同時に市内の異なるセクターにいる方々をつないだり、可視化していく役割を目指していました。
ただ、外来者の僕は、このスキームを構想しながらも、地元とどう関わっていくか見えない状況でした。そんな中、すでに長田で活動していた彼女たちは、さまざまなコミュニティに入り込み、コミュニケーションをつないでいました。そして、彼女らが示してくれた振る舞いは、見えざる神戸市のマップを作っていくようなこのプロジェクト指針を作ってくれたように感じてます。

砂越陽介
—
11-1 Studio /
Yosuke SAGOSHI Atelier代表

11-1 Studio Fellowship

建築領域ともアート領域とも異なる、まだ定まっていない分野の「新しい都市像」を見せていく

11-1studioという場をその周りの町工場・商店街や地域拠点まで少し広げたりつなげたりしてできる、新しい街の像を意味ある形として見せたい。ともするとリサーチ寄りの実体のないものになる恐れも、逆に一過的に盛り上がるだけのイベントで終わる恐れもありましたが、そんな抽象的で前例がなく難しい要求に対し、for Citiesの2人は、巧みなプログラム・魅力的なビジュアルとアーカイブで応えてくれました。

まず、建築領域ともアート領域とも異なる、まだ定まっていない分野に対して、どんな参加者がチャレンジし形にしていくのか、そこが最重要でもあり想像がついていない部分でした。
for Citiesのディレクションによる募集要項やデザインチームelementsによるビジュアルの魅力、どこにそれを投げかけるかなどが奏功し、趣旨を理解しながら、面白く意欲的で、意味のあるモノとしてアウトプットしようとする参加メンバーが集まったこと、それがまず良かったことの1つです。

圧巻だなと思ったのは、協働で行った成果展示の空間づくりと発表会のセッティング。
思い返すと設営当日まで「カラフルな防球ネットに各チームが展示パネルをクリップしていく」ということ以外事前には何も決まっておらず、その場で11-1studioにあった昔のオレンジ色の脚立やろくろや古材などをfor Citiesの2人が「これを使ってもいいですか？」とピックアップして展示にしていき、魅力的な展示空間ができていったのが印象的でした。
グラウンドレベルの大西さんをゲストに行った成果展示発表会では、途中途中でプロジェクトに関わった人々をはじめとし、多くの異分野の人々が展示含め観にきて意見交換をし、良い場になっていて、カメラマンの村上さんによる記録映像もそれを生き生きと残してくれました。

フリー屋台や仮寝ゴザレンタルなど、いくつかのアウトプットはその後も11-1studio内に残り、大学生のサークルがまちづくりイベントに屋台を繰り出すなど、面白い連鎖が続いています。

浅見和彦
—
株式会社STYLY
プロデューサー

Urbanist Kit 新潟

for Citiesという触媒が変化を生む

新潟市のプロジェクトでワークショップの設計や運営をご一緒しました。私が知らない間に地元のクリエイターと仲良くなってネットワークを作ってくれたり、信濃川沿いで飲む生ビールのおいしさを目をキラッキラさせながら語っていたり、地域の人も目から鱗な街歩きを実施してくれたり、ワークショップのスコープから飛び出して、for Citiesという触媒が様々な変化を生むきっかけになったと感じています。

増田匡
—
神戸市元長田区長
（現中央区長）

Urbanist in Residence in 長田

for Citiesの二人は地域を耕し直す力になる

for Citiesとの出会いは、「アーバニスト」という言葉との出会いでもありました。私だけでなく、お二人と交流された住民の方々も自らの活動が「まちを楽しみ、まちに働きかける」こと、と再定義されることで新たな意味を見出せたと思います。また、お二人が長田区でのレジデンスを通じて、西村組を始め様々な人と繋がり、神戸で活躍する多様なプレイヤーの一員となられたことで、神戸はさらなる魅力を獲得したと喜んでいます。

相樂園香
—
Slogan Studio
デザイナー

Urbanist School #1 Tokyo Rhythm Analysis

小さな「都市」への案内人

URBANIST SCHOOLのビジュアル制作のため、三軒茶屋の街を散策しながら街のリズムを探しました。普段は家を出る瞬間にイヤフォンをつけて遮断していた街のノイズが、お二人とのプロジェクトを経たあとにはリズムに変わり、耳をあけてお散歩をする日が増えました。都市というと大きな言葉ですが、自分のいる場所に改めて意識を向けてみる・別の角度から眺めてみる。そんな新鮮さをいつも分けてくれるお二人です。

QUESTION 5 これからやりたいことは？

石川由佳子　やりたいことリスト

1. 創造的メンテナンス

古いものを壊し、新しく創造してきた時代に限界がきている現在、今在るものを活かし、その土地固有の特性を丁寧につむぎ生かす、無理のない街や場づくりを考えたい。

2. 人間以外も含めた生き物のにぎわいを

どこかの地域や場所に向き合う時に、人間のための機能だけでなく、周辺の動植物も含めた生き物全体のにぎわいを作るようなアプローチで地域や場をデザインしたい。

3. 海外拠点をつくりたい

アジアを中心として周辺国や人との連携をさらに加速させたい。そう思うと、そろそろ、海外に拠点をつくってもいいかもしれない。個人的にはベトナムあたりで一つ作ってみたい。

4. 弱さに寄り添う環境づくり

都市に住まう中で、誰しも身体的なままならなさや精神的なゆらぎがあるはず。しかし、こういった部分にあまり私たちは目を向けてこなかったようにも思う。福祉施設でも、慈善事業でもない、その場所に居続けられると感じるようなセーフティーネットと心理的安全性の高い環境づくりに挑戦したい。

杉田真理子

手を動かしながら持続可能な都市の未来を考える、クリティカルメイキング

“息をするように創作する人になりたい”。ここ数年、そんなことを考えています。私は普段、定期的に海外で活動しつつも、京都を拠点に活動しています。京都に移住をしてから、暮らしそのものをプロジェクトとして捉え、自分で実際に手を動かして、何かを作ってみるということを意識的に行ってきました。そこで出会ったのは、クリティカル・メイキング（Critical Making）という考え方です。
これはある問いに対して、“つくる”という行為から、考え、問いを深めていくアプローチで、何かを“つくる”ということがゴールというよりも、手を動かしながら思考し続ける行為。「何をしているか分からない」とよくコメントをもらうfor Citiesですが、その分からなさ、曖昧さを大切にしつつも、ソフト設計にとどまらず、具体的な場をつくり運営したり、オリジナルのプロダクトを作ったり、都市の現実を塗り替えるための試みを、手を動かしながら創造していきたい。そのために、今後は設計やプロダクト部門のメンバーも増やし、ハード面でのデザイン介入もfor Citiesとして行っていけたらと思っています。

APPENDIX

アーバニストになるためのAtoZ

自分の家の玄関やバルコニーに、
むちゃくちゃ自分らしい何かを染み出させてみる

穴のなかや建物の隙間などに目を向けて、
人間以外の生物を探してみる

買い物は、その街で作られたものや
その街にあるローカルのお店で

その街を舞台にした物語、
小説や映画、ドラマなどがあれば見てみる

その街を舞台にした物語、
小説や映画、
ドラマなどがあれば見てみる

住んでいる街のことを
誰かに自慢してみる

通ったことのない道は全て制覇してみる

居心地のよい場所をみつけて、
そこから見える景色に目を凝らす

半径 200m を掃除してみる

お昼ご飯は必ず行ったことのない店で食べてみる

町で一番面白そうな人のところに行ってみる

ひたすら歩く、
もしくは自転車で滑走する

たまに自分じゃない役割を演じて
街を楽しむ

町の中で、気にいらないものを
ポジティブにディスりながら歩く

自分とは全く違う立場の人と
対話してみる

写真：村上大輔、混ぜるな危険×山田ゆうすけ、阪下滉成、Ebrahim Bahaa-Eldin、堤大樹、岡愛

WHEN WE S

FOR CITIES

法人名　一般社団法人 for Cities
代表理事　石川由佳子 / 杉田真理子

HP　http://www.forcities.org/
Email　info@forcities.org

所在地　東京都杉並区（東京オフィス）
京都市左京区（京都オフィス）

THE CI